

第3章 全国ブランドへの道のり

「焼柿」から「市田柿」へと改称し、各地の中央市場へ進出した大正時代。戦争中に行われた皇室や靖国神社への献上は、市田柿の名前を全国へ広めるきっかけとなりました。戦後は、栽培・加工の技術も向上し、機械化で農家の規模拡張も進みました。長野県初の地域ブランドに認定され、健康食品としても注目が集まっています。



**飯田市三穂地区に焼柿を広めた功労者
下市田から持参した柿の木は、今も現役**

宮沢熊太郎

●みやざわくまたろう

安さんが書いた文章には、初めての出荷に
関して、「：下市田壮年団役員会で話し合
い「これだけ名声が高くなったので何とかし
て当村名産として天下に唱導して」との意
見の一致をみた。」、また「送り先は、東京
の神田万惣青果店二〇〇箱、名古屋青果
市場二〇〇箱、大阪全店二〇〇箱。」、
「予想外の安値で：（略）：結局骨折り損の結
果となった。」などと残されています。

自らは柿やリンゴなどの果樹栽培に早く
から取り組み、摘果や施肥、病虫害の研究
を通じて、上沼正雄さんらとともに市田柿
の改良にも力を入れました。昭和四年（
一九二九）二月に市田小学校で開かれた果樹
普及講演・講習会（講師：橋都正農夫ほか）
には村助役として参加し、果樹栽培の将来
性を力強く訴えたといえます。

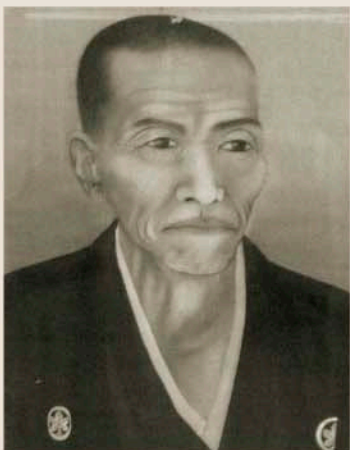


酒井安【1888~1973】

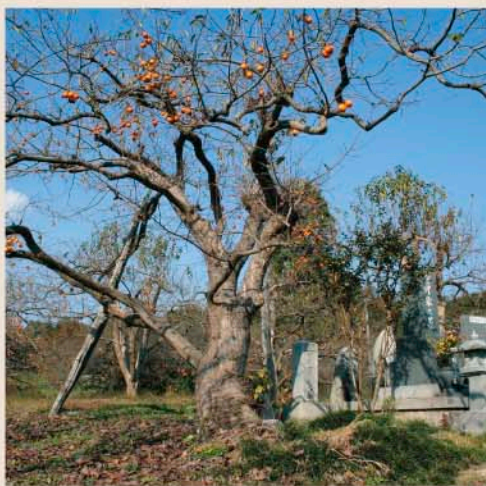
宮沢熊太郎さんは、福澤利喜三郎さん、
伝蔵さん親子が柿の苗木の保管に室を借り
ていたと伝えられる佐々木半左衛門の次男
として江戸時代末期の元治元年（一八六四）
に誕生しました。

熊太郎さんが、三穂村（現在の飯田市三
穂地区）の宮沢家に養子に行ったのは明治
三十年（一八九七）頃。『三穂村史』によ
ると、大正十二年（一九二三）頃に、下市
田から焼柿の苗木を持ってきて宮沢家の墓所
に植えたといわれています。

焼柿（市田柿）の美味しさが村中に広ま



宮沢熊太郎【1864~1949】



熊太郎さんが持参したという市田柿。波柿を台木に接が
れていて、胴回りは170cmもある

ると、洪柿（立石柿）を台木にして接ぐ人
が増え始めました。接ぎ木作業を担ったのは、
熊太郎さんの甥の宮沢敬信さんです。熊太郎
さんの妻・ひささんの弟・利一さんと、熊太郎
さんの妹が結婚した縁もあり、敬信さんと熊
太郎さんは仲がよかつたと想像できます。

市田柿は、立石柿よりも実がひと回り大
きく甘みが強いのが特徴です。三穂地区全
域で市田柿が作られるようになると、家々
の軒先にも真っ赤な柿すだれが見られるよう
になり、秋の風物詩として定着していきま
した。